

# そけい 鼠径ヘルニア

外科 おおえだ まもる 大枝 守

一般的に『脱腸』と言われている病気です。

『ヘルニア』とは体の組織や臓器が正しい位置からはみ出した状態をいいます。

場所によって病名がかわり、『鼠径』とは脚の付け根の部分であり、似たような病気として大腿ヘルニアがあります。

子どもでもなることがあります(生まれつき)、高齢者に多く、男性に多くみられます。

原因としては加齢などのため筋肉が弱くなり筋肉に穴があいた状態となり、その穴からお腹の中の腸や卵巣、大網(脂肪の膜)などが出てきます。

鼠径ヘルニアの症状は腹圧をかけた際(立ったり、お腹に力を入れた時など)にお腹のものが出てくるため皮膚に膨らみを生じ、腹圧がかかなくなると(横になるなど)膨らみが消失します。その他違和感、痛み、便秘などが起こることがあります。

診断は視触診で可能です。場合によっては超音波検査やCT検査を行います。

鼠径ヘルニアは自然治癒することなく、投薬も効果なく、治療としては手術をして脆弱になった筋肉を補強するしかありません。手術は急を要するものではありませんが、手術をしないで放置していると段々膨らみが大きくなります。極稀に嵌頓(出た腸が戻らなくなり、膨らみが急に硬くなったり、元に戻らなくなったりし、激痛を伴う)をおこすことがあります。嵌頓をおこすと整復(腸をお腹の中に戻す処置)が必要になり、場合によっては腸が壊死(血流が悪くなり腸がくさる)するため緊急手術が必要になることがあります。

年間約13万人以上の方が受けており外科で多く行われている手術です。当院でも高齢者が多いため鼠径ヘルニアは当院で最も多く手術をする病気です。手術ではお腹からでていものをお腹の中に戻し、筋肉の穴を人工物を使用して塞ぎ、筋肉を補強するようにします。手術のアプローチとして鼠径部を直接切する方法(鼠径部切開法)と腹腔鏡を使用して腹腔内から行う方法(鏡視下手術)があります。鏡視下手術は手術の際に全身麻酔が必要、再発症例や下腹部の手術既往がある症例では難しいことがあるなど全症例でできるわけではありません。鏡視下手術は手術時間が長くなるものの、術後疼痛や神経損傷が少ない、入院期間が短い、回復が早い、社会復帰が早いなどの利点があり、手術後の再発が少ないとの報告もあります。鏡視下手術はこの10年ぐらいで急速に増加してきております。

鼠径ヘルニアは、手術でしか治療できず、放置すればヘルニアが大きくなり治療が難しくなるため、できれば早期に病院受診・手術を受けることをお勧めします。

